

現場状況：その重要性

～「正しいと確信する判断」を支えるリソース～

「正しい判断」とは：1639年10月16日デカルトの手紙

思ったこと（主観）と事実（客観）が一致する判断

思ったこと（主観）

事実（客観）

意識障害の原因は低血糖だ。

⇒ 傷病者は低血糖だった。

霧状30°の放水は火災室内温度
降下に有効だ。

⇒ ノズル水平・240L/分で霧状30°で放水
30秒で、室温は600°低下した。

この癌（stage I）は手術で治る。

⇒ 術後5年して健康（=癌は治癒）

救急・消火活動や診療では、現場での「判断」とその「正しさ」の判定基準となる
事実（しばしば、結果）に時間的ずれが起こり得る。

この場合、活動の最中に当事者には「正しい判断」を得ることは不可能となる。

しかし、「正しいと確信する判断」は、活動の最中でも
当事者に常に可能

(「医療とは何か」行岡 河出ブックス・144頁～)

「正しいと確信する判断」の成立条件

- 1) 自分の直観体験 (低血糖だ。 室温は下がる。 癌は治る。)
- 2) 直観を支える事実 (= 普遍的事柄)

↑
傷病者の観察結果だけでなく現場状況の中に
直観体験を支える事実がいくつも存在する。
この事実が、確信を支えるリソースとなる。

例えば

意識障害の傷病者のベッド横にこんなものが落ちていた



インスリンカートリッジと気付けば、低血糖という確信を支える事実として捉えることができる。

他に、・・・